
Phillip Cary
Outward Signs:
The Powerlessness of External Things in Augustine's Thought
Oxford University Press, 2008, pp. xxiv + 344

佐藤 真基子

著者 Phillip Cary はエール大学において哲学博士号取得後、現在イースタン大学教授。アウグスティヌスの思想を研究の専門としている。本書に先行して彼は、*Augustine's Invention of Inner Self* (Oxford University Press, 2003) を著し、アウグスティヌスが、神を見るものとして人間の知性を位置づけるプラトン主義と、人間の知性が神に等しいものではないとみなすキリスト教の両方の考えに根ざして、「新たな自己」の概念を形成していることを明らかにしている。すなわち、自らがそこに入り、神を見出す「内なる場所」としての自己である。そしてこの、自己を越えた他者を含む「内なる自己」に秘められたことがらを表現するものとして、「外なる」記号を位置づける、アウグスティヌスの記号論に焦点をあてて論じているのが本書 *Outward Signs* である。本書において Cary は、このアウグスティヌスの記号論を“expressionist semiotics”と名づけ、その記号論の形成過程と独自性を第1部において、そしてこの記号論に基づいて、アウグスティヌスが、あらゆるサクラメントは記号すなわち外的なものであり、人間の救いに無力であるとする神学を形成していることを第2部において論じている。

“expressionist semiotics”とは、記号についてのいかなる理解であるか。Cary は、言葉を、内的思考を表現する記号とみなす言語理解の起源をアウグスティヌスに帰す。言葉を、内的思考を表現する記号とみなす言語理解については、アリストテレスの『命題論』冒頭の議論にその起源があるとする解釈の伝統があるだろう。しかしそれは、アウグスティヌスの記号論の影響下にあってアリストテレスの用いる“symbola”と“sēmeia”の語の区別を見過ごした、ポエティウスら中世の解釈者の誤読に基づくものであると Cary は指摘する。彼によれば、アリストテレスは身体と魂、感覚的事物と知的事物の関係を記号論で語るとき、両

者を、存在の次元を同じくして互いに影響し合う力をもつものとして関係づけている。そこには、後者を「表現」するとき前者がそれとして成り立つという理解はない。それに対してアウグスティヌスは、外的事物と内的事物を存在の次元の異なるものとみなしている。外的事物は内的事物よりも低い次元にあるもので内的事物に対して支配的力をもたないが、内的事物は上位にあって、外的事物を意志的原因によって変える力をもつと考えるのである。そこに、言葉は外的事物であり、「表現」や「伝達」の意志があってはじめて言葉として成り立つという理解がある。この理解を Cary は“expressionist semiotics”と名づけているのである。

たしかに、「言葉は記号」であり「記号は何も教えない」（『教師論』）と語るアウグスティヌスにおいて、言葉は知の原因とみなされていない。こうした言葉についての理解は、感覚的事物から経験的推論によって知的事物を明らかにするという、アリストテレスやストア派に共通する記号論とは異なるものであるといえよう。このアウグスティヌスの言語観はいかにして形成されたのか。それは、プラトンの考えに依拠して形成されたものであると Cary は分析する。たとえば『教師論』で提示される、人は事物そのものを先に知っているのであれば記号が指し示す事物を理解できないという見解は、『メノン』において、メノンの召使が幾何学の知を得る場面に描かれる認識論と一致する。また、人は記号から学ぶことはなく、記号は知るように促すかぎりであるという見解は、『パイトン』に見られるような、感覚的事物が知的事物を思い出させるという考えから得られたものであると考えられる。プラトン自身は「記号」の語をもってこうした認識論ないし存在論を論じているのではない。しかしアウグスティヌスは、感覚的事物と知的事物を存在の次元の異なるものとして関係づける、プラトンに由来する考えに基づいて、“expressionist semiotics”を形成している。アウグスティヌスは、人は真理を知りえないという懐疑論的見解にも同意しないが、このことも“expressionist semiotics”に基づいてのことであると Cary は分析する。

そして、Cary によれば、“expressionist semiotics”はアウグスティヌスにおいて、言語論の範疇で論じられるかぎりではない。プラトン主義に基づく彼のこの記号論は、聖書言葉も受肉したキリストも諸々のサクラメントも外的事物であって、それ自体が教えるものではなく、内的事物に注意を向けるように促すものであるとの神学に発展している。しかし先行諸研究では、アウグスティヌスは

懐疑論のみならずプラトン主義も捨ててキリスト教に転向したとみなす見解がしばしば提示されてきた。Caryはこの見解に反論するのである。Caryによれば、アウグスティヌスはキリスト教の教義をプラトン主義の仕方では解釈していたのであって、彼において両者の考えは一貫して、信仰と理性の対立と言われるような仕方で対立するものではなかった。アウグスティヌスが、当初哲学的対話編を多く著すが後には聖書解釈の実践的書物に多く取り組むようになることも、「教え」を表す語が“disciplina”から“doctrina”に変化していくことも、プラトン主義の放棄ではなく、聖職に就いたことによる職業的必要にともなう変化である。アウグスティヌスが「内なる教師」として提示するキリストも、哲学者が語る神的知性と区別されたものではなく、救いは神の内的恩恵によって成就するという理解も、人は知性の光の助けのもとで内的に神的知性を見るというプラトン主義の考えから学ばれたものである。(この恩恵論の形成過程についてCaryは*Inner Grace: Augustine in Traditions of Plato and Paulo* (Oxford University Press, 2008)を本書*Outward Signs*と同年に刊行している。)

しかし、Caryが主張するように外的事物を離れて内面において神を見出すことに生の目的をおくプラトン主義的理解が維持されているとするならば、受洗以前にすでに神を内面に探求することができていたアウグスティヌスにとって、いわば外的事物である人間キリストも受洗の儀式も、すなわち sacrament は不必要ではないかという疑問がありえよう。この疑問に対してCaryは次のように答える。すなわち、哲学的、真理探究の生活を望んでいたアウグスティヌスにおいて自らの性的欲求は哲学的生活の実践を阻むものであり、その欲求の節制を実現するために、彼には教会に属す必要があった。アウグスティヌスが『告白』第8巻で自らの回心譚を語る時も、はじめにウイクトリヌスの回心譚を紹介している。ウイクトリヌスは、受洗する以前にすでに聖書を熟読し、信仰を公にはしないが自分はキリスト教徒であると言っていた人物である。すなわち本巻で語られている回心譚は、受洗を決意するに至る過程の告白であって、キリストを信じるに至る過程の告白ではない。そうであるからこそ、アウグスティヌスが語る自らの回心は独身生活の選択と同一だったのである。かくして、sacrament はアウグスティヌスにおいてたしかに神を内面に探求するために役立つものとして理解されてはいるが、神的知を与えるものとして役立つものとはみなされていないとCaryは論じる。

アウグスティヌスの思想形成に対する、プラトン由来の考えの関係と展開に注目する議論は、Cary の上記先行著作においても論じられていたが、本書において読者は、彼の研究の深化を辿ることになる。すなわち、アウグスティヌスの記号論においてプラトン由来の思想の影響を読み取れること、そしてその理解が、彼の神学形成に密接に関わっていることを、アウグスティヌスの著作をほぼ時系列にそって辿るのである。アウグスティヌスの記号論ないし言語論についての研究は、現代の記号論や解釈学への注目とともに進展してきたが、その記号論が、人間と神の関係を考察する神学的議論とどのように関係するかについて明示的に提示する研究は未だ少ない。本書は、アウグスティヌス独自の記号論の形成過程を示したかぎりではなく、 sacrament に関する彼の神学の背景に記号論があることを明示した点で意義があるといえよう。しかし、世界が「言葉」においてつくられたという、「創世記」と「ヨハネによる福音書」を関係づけるアウグスティヌスの創造思想においては、世界そのものが“outward signs”であるという理解があると思われるが、本書では論じられていない。アウグスティヌスがくり返し取り組んだ創世記解釈の議論についてさらに検討されるべきであると思われる。

だが、Cary 自身の研究の見通しは別のところにあるようである。本書において彼は、アウグスティヌスの“expressionist semiotics”には、 sacrament を、人を内面に向けさせるために役立つものとして位置づける理解と、知を教えるものではないかぎりで役立たないものとして位置づける理解の、両方が含まれることを示した。そしてそれぞれが、ルターとカルヴァンにおける、 sacrament の位置づけについての見解の違いとなって引き継がれているとの見通しを Cary は示している。また、「内なる自己」の概念が、形をかえて現代においても受け継がれているとの見通しも得ているようである。我々は Cary に、これらアウグスティヌスにおける諸概念の、後世における展開の分析を期待しよう。
